

古町遺跡　流入塚

—長野市綿内町区土地区画整理事業に伴う発掘調査—

1993・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始原をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考えるうえでの実証者といえましょう。

このたび長野市総内町区土地区画整理事業にともない、古町遺跡流入塚の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でも多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第54集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成5年3月

長野市教育委員会

委員長 奥村秀雄

例　　言

- 1 本書は長野市綿内町区土地区画整理事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野市綿内町区土地区画整理組合の委託を受けて長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市若穂綿内字町に位置するが、周知の古町遺跡の範囲内と理解できるため古町遺跡（流入塚）として報告するものである。
- 4 本書は矢口の指導のもとに千野が執筆・編集した。
- 5 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。
- 6 遺構の測量は、標高・南北軸BMを基準に1mメッシュをくみ簡易的な造り方測量によって実施し、1:20の縮尺で基本原図を作成した。本書で用いた遺構図の縮尺はそれぞれ明示してある。
- 7 遺物実測図に関しては基本的に1:3の縮尺に統一してあるが、その他のものについては適宜縮尺してある。

目　　次

序	
例言	
第1章　調査経過	1
1　調査に至る経過	1
2　調査体制	1
第2章　調査地周辺の考古学的環境	3
第3章　調査	5
1　調査	5
2　調査のまとめ	12

挿　図　目　次

図1　調査地ならびにその周辺の地形	2
図2　調査地周辺遺跡分布図	4
図3　流入塚墳丘測量図	6
図4　中央トレンチ断面実測図	7
図5　火葬墓検出状況実測図	8
図6　下層集石実測図	10
図7　出土遺物実測図ならびに拓影	13
図8　出土遺物拓影	14

第1章 調査経過

1 調査に至る経過

調査地は地形的には千曲川によって形成された自然堤防上に位置し、現状はリンゴ畠や畠地となっている。

平成3年、この地域において事業面積約2,000m²にわたる、長野市綿内町区土地区画整理事業が計画された。事業予定地は周知の「古町遺跡」と同一の自然堤防上に位置するものと予想され、古町遺跡と連続する可能性が考えられたため、長野市教育委員会は事前に現地踏査による分布調査を実施した。その結果平安期と考えられる土師器・須恵器破片の散布と、中世に構築されたと考えられる塚状のマウンド（流入塚）の存在を確認した。

翌平成4年、事業着手前に掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊のおよぶ可能性の高い道路部分について、試掘による確認調査を実施したが、明確な遺物包含層の存在は確認できなかった。

この結果、調査範囲は造成事業によって破壊される可能性が高い塚部分に限定されることになった。

調査は平成4年6月3日～6月22日までの、実質12日にわたり実施した。

なお、今回調査の対象となった塚は、史跡等の認定はなされておらず、今回の事業に伴う事前の分布調査によつて確認されたものである。周辺の古老の話によれば、古くより流入塚と呼ばれているようであり、本報告に当たつてもこの名称を使用したい。

2 調査体制

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村 秀雄

総括責任者 市埋蔵文化財センター所長 小山 正

庶務係 " 所長補佐 山中 武徳

" 職員 青木 厚子

調査係 " 調査係長 矢口 忠良

" 主査 青木 和明

" 主事 千野 浩

" 主事 飯島 哲也

" 専門員 中殿 章子

流入塚近景

" 専門員 横山 かよ子

" 専門員 笠井 敦子

" 専門員 山崎 佐織

" 専門員 山田 美弥子

" 専門員 寺島 孝典

" 専門主事 太田 重成

" 専門主事 小松 安和

" 専門主事 羽場 卓雄

調査員 矢口栄子 青木善子

参加者 西尾千枝 向山純子



試掘調査風景

図1 開港場等の位置を示す地図



第2章 調査地周辺の考古学的環境

長野市若穂地域は、地形的には千曲川によって形成された自然堤防とその周辺の低湿地、ならびに保科川・赤野田川等によって形成された扇状地によって構成される。この地域は「長野市若穂文化財地図」作成事業等により、かなり詳細な遺跡分布調査が実施されているが、正式な発掘調査例は少なく、実態は不明な部分が多い。しかし、近年上信越自動車道建設事業に伴い大規模な発掘調査が実施され、従来の認識を大きく改めさせる成果が得られてきている。以下、正式の発掘調査がなされた遺跡を中心に概観し、周辺の考古学的環境としたい。

古町遺跡（図2-1）

綿内町・芦ノ町・牛池にかけての千曲川の自然堤防上に広がる弥生時代後期から平安時代の集落遺跡である。正式調査はなされていないものの、昭和54年下水道工事に伴って平安時代の土師器・須恵器が発見され、昭和56年には道路改修工事の際に布目瓦が出土している。瓦片とともに土師器・須恵器も採集されており、平安時代・10世紀代のものと考えられている。単なる集落遺跡としてだけではなく、文献に記されていない廃寺が存在した可能性も高いものと言える。

岩崎遺跡（2）

綿内岩崎地籍の千曲川自然堤防上に立地する遺跡で、平成3年市立綿内保育園改築事業に伴い発掘調査された。平安時代の住居址や中世の土葬墓2基などが検出されている。特殊な出土遺物としては縁袖陶器破片・青銅製帶金具などが住居址より出土している。

榎田遺跡（3）

千曲川右岸の自然堤防上および後背湿地に立地し、平成元年～3年にかけて上信越自動車道建設に伴い発掘調査される。弥生時代中期～近世にわたる複合遺跡であるが、弥生中期～後期・5世紀後半～6世紀・6世紀後半～7世紀前半・9世紀後半・15世紀代の集落が検出されている。特に弥生時代中期の二重の溝に囲まれた環壕集落や、室町時代の環濠屋敷址など注目すべき遺構が検出されている。

春山B遺跡

上信越自動車道建設に伴い調査されたもので、千曲川右岸の自然堤防上に立地する。弥生時代中期～後期の集落と、後期の方形周溝墓群、弥生時代後期ならびに近世の水田が検出されている。

川田条里遺跡

千曲川右岸の後背湿地に展開する水田址を主体とした遺跡で、上信越自動車道建設に伴い調査がなされている。調査面積は10万m²以上におよび弥生時代中期・後期、古墳時代前期・後期、平安時代、中世、近世の埋没水田が検出されている。弥生時代の小区画水田をはじめ、各時代における水田開発技術・水田經營の方法等に関する具体的な事例が明確化されている。

綿内要塞（春山城址）

春山の峰に構築されており、井上氏一族の居城と推定されている。山城は城の峰と春山の山頂部の細尾根に築かれており、郭・空堀・石垣・土塁が残存する。創築年代は戦国時代と考えられている。

参考文献

長野市若穂公民館1983 『若穂の文化財』

長野県埋蔵文化財センター1989 1990 『長野県埋蔵文化財センター年報』 6・7

新人物往来社1980 『日本城郭大系』 第8巻



1 古町遺跡 2 石崎遺跡 3 梶田遺跡 4 春山B遺跡 5 春山遺跡 6 川田条里遺跡 7 前山田山遺跡
8 大柳遺跡 9 大柳古墳群 10 清水古墳群 11 稲内要塞(春山城址) 12 小柳井上氏居館址

図2 調査地周辺遺跡分布図

第3章 調査

1 調査

流入塚は事業予定地東側のリンゴ畠の中に存在し、高さ60cmほどの土饅頭状を呈していた。墳頂には石仏ならびに五輪塔の一部が石仏を取り巻くように配置されているのみで、この石仏が無ければ一見しただけでは塚とは判断しえぬような状況であった。また墳丘は草で覆われ、際立った外部施設の存在も意識されなかつたが、ただ、ところどころに河原石が顔を出しており、また大きな平石が散在するなど集石の存在が予想されるのみであった。

表面清掃・墳丘測量

調査は先ず墳丘の清掃からとりかかった。後世の擾乱により、表面はかなりの部分が荒らされていることが予想されたが、とりあえず表層の腐食土層を取り除き、墳丘測量に備えた。

表面清掃の結果、墳丘表面には10cm前後の河原石が算き石状に検出された（写真3）。付近の地山面には砂礫屑の堆積は現地表下1.50m付近まで認められない点や、五輪塔の一部も転用されている点などからして、明らかに人為的な集石と考えられるが、近世～現代の陶器破片等がかなり混入しており後世の集石である可能性が考えられた。



写真1 墳丘清掃作業



写真2 墳丘測量作業



写真3 表面清掃終了後の流入塚

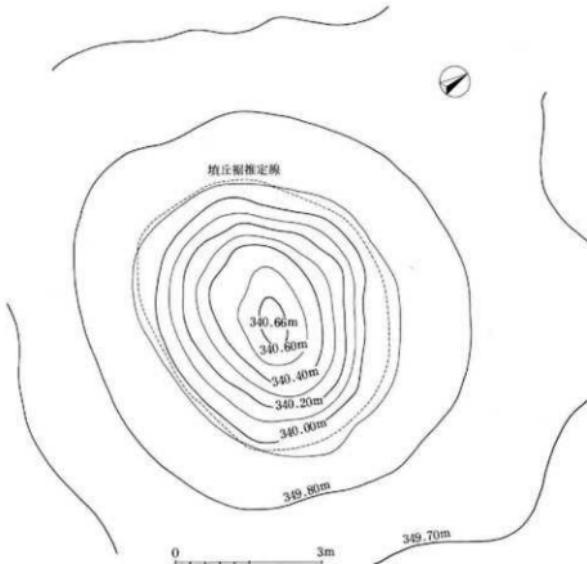


図3 流入塚墳丘測量図

また、墳丘東側の裾部付近には50~60cm大の平石が散在しており、擾乱によって掘り出された内部施設の可能性も想定された。

とりあえず、この面にて墳丘測量を行なった結果が図3である。墳丘は東西方向にやや長い不整円形を呈し、直径5.70m、短径4.70m、現地表面からの高さは86cmである。北側を中心に等高線の乱れが目立つが、これは後世の擾乱がこの部分に集中するためである。墳丘の周辺には大きな地形変化は認められず、なだらかに現地表面へと移行する。

中央トレンチ

前述のごとく墳丘表面の集石は後世のものである可能性が高いこと、墳丘周辺に散在する平石が内部施設の一部である可能性が考えられること等より、先ず内部構造を確認する手段として、墳丘中央部にほぼ南北方向にトレンチを設定した。

結果、墳丘は基本的に4層から構成されていることが確認された（図4）。

第1層は多量の円礫と腐食土ならびに若干の暗黄橙色砂質土からなっており、全体に締まりはない。もっとも堆積の厚い部分で25cm前後であるが、全体に円礫を混じている。下層付近からも近世～現代の陶器破片が出土しており、明らかに後世の積み直しによって形成された集石層と考えられる。また珠洲系の摺り鉢と考えられる破片もかなりの量出土している。

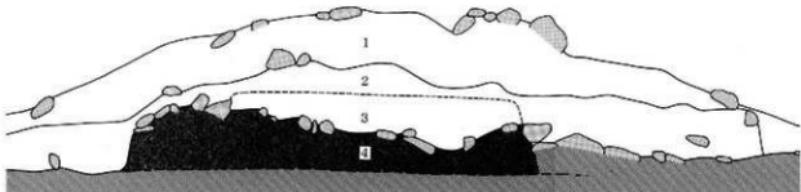


図4 中央トレンチ断面実測図 (1:40)

第2層は暗黄褐色砂質土で、円礫は全く含まず炭化物を比較的多量に含む。埴丘裾部分は、後世の搅乱が著しく不明な部分が多い。

第3層は暗黄褐色砂質土層で、基本的に第2層と同質である。しかし、平面的に非常に固く縮まっており、人工的に叩き締められて造成されたテラス状の平坦部の存在が予想された。焼骨片・炭化物の包含が顕著に認められる。

第4層も暗黄褐色砂質土で地山へと漸移的に移行していくが、上面には埴丘表面にて認められたのと同様の集石が検出された。またこの集石上面にて青磁破片が出土している。

火葬墓

次に調査は、第3層として確認されたテラス状の平坦部の面的追及を試みた。第1・2層を除去した状況が写真4・図5である。

埴丘中央部を中心にして径2mほどの範囲にわたって、固く叩き締められたテラス状の平坦部を検出した。平坦部の東縁付近を中心にして五輪塔や平石が検出されているが、これらは造成したテラス部分の土留め的な性格を有するものと理解したい。五輪塔も火輪・地輪部分が出土したのみで他の部分は存在せぬことよりすれば土留め石に転用されたものと考えられる。

テラス状の平坦部上面ならびにその周辺に1～5号の5基の火葬骨の集積を検出した。これらは藏骨器などを伴つてはいないがいずれも円形にかたまっており、曲物などの木製の藏骨器の存在が予想される。

特に平坦部上面に位置する1号墓は、長さ10cm前後の河原石を利用して径30cmほどの小石砌的な施設を構築している。深さは15cm程で、底面には特別な施設は存在しない。



写真4 テラス状平坦面検出状況

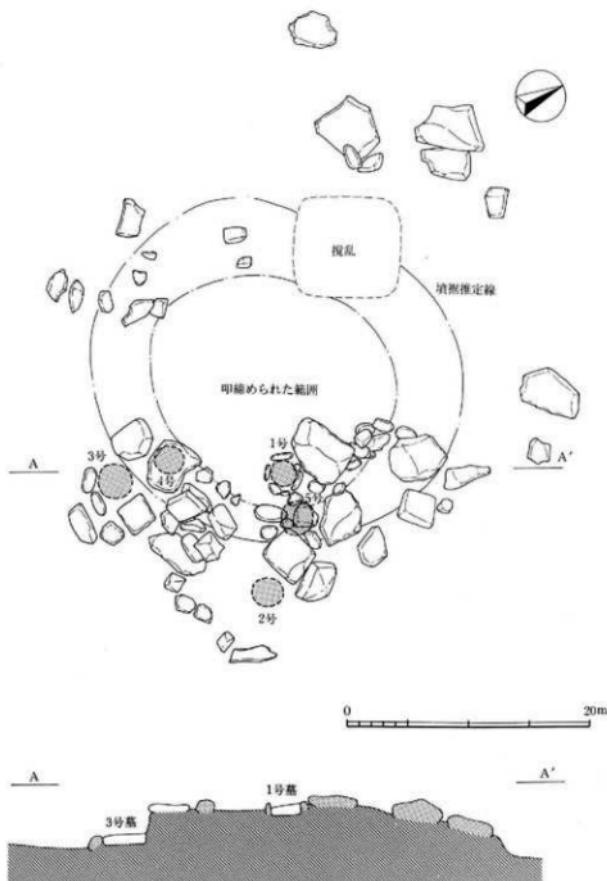


図5 火葬墓検出状況実測図 (1:40)

4号・5号は平坦部側面に、2号・3号は墳丘裾部に存在するが、これらには特別な施設は認められず火葬骨が円形にかたまって出土しているのみである。

中央トレンチ掘削時にも平坦部中央付近で火葬骨が検出されており、平坦部上面には1号墓のほかにもう1基の火葬墓が存在した可能性もある。

これらの状況から勘案するに、固く叩き締められたテラス状の平坦部は1号火葬墓を作るために造成されたも

のであり、その後平坦部側面ならびに墳丘裾部に2~5号の火葬墓が順次埋葬されていったものと考えられる。いずれの火葬墓についても副葬品等の出土はなく明確に時期比定できる根拠はない。



写真5 1号火葬墓



写真6 1号火葬墓掘り上がり状況



写真7 2号火葬墓



写真8 火葬墓群検出状況

下層集石

次に調査は第4層上面にて確認された下層集石を面的に追及した。造成された平坦面の盛り土を除去した状況が図6・写真9~11である。

集石は南北二つのマウンドが検出され、南側のものを集石A、北側のものを集石Bとした。集石Aは基本的に人頭大以下の大きさの円礫によって構成される。扁平な平石も含むがこれらは集石面よりも浮いており、また原位置を留めるものではない。集石は2.50m×3.10mほどの不整な長方形形状を呈し、基底面からの高さは約30cm・集石層自体の厚さは20cm程度である。集石Bは長径2.40m・短径1.40mほどの長楕円形状を呈し、基底面からの高さは30cm程度である。集石内部に扁平な平石を含む点集石Aとは異なるが、何らかの施設が構築されていた可能性は低いものと考えられる。集石A・Bともに集石上面からは若干の青磁破片や、珠洲系陶器の破片がかなりの量出土しているが、集石下からの遺物の出土は無い。

この集石は内部施設の有無を確認するために最終的に断ち割り作業を行なったが、明確に何らかの施設ととらえられるものは確認されていない。

上層の造成面との関連では、この集石の東斜面を利用して平坦面を造成しており、造成面の基礎としてこの集石が形成された可能性は低いものと思われる。いずれにせよ、性格・時期等詳細は不明と言わざるを得ない。

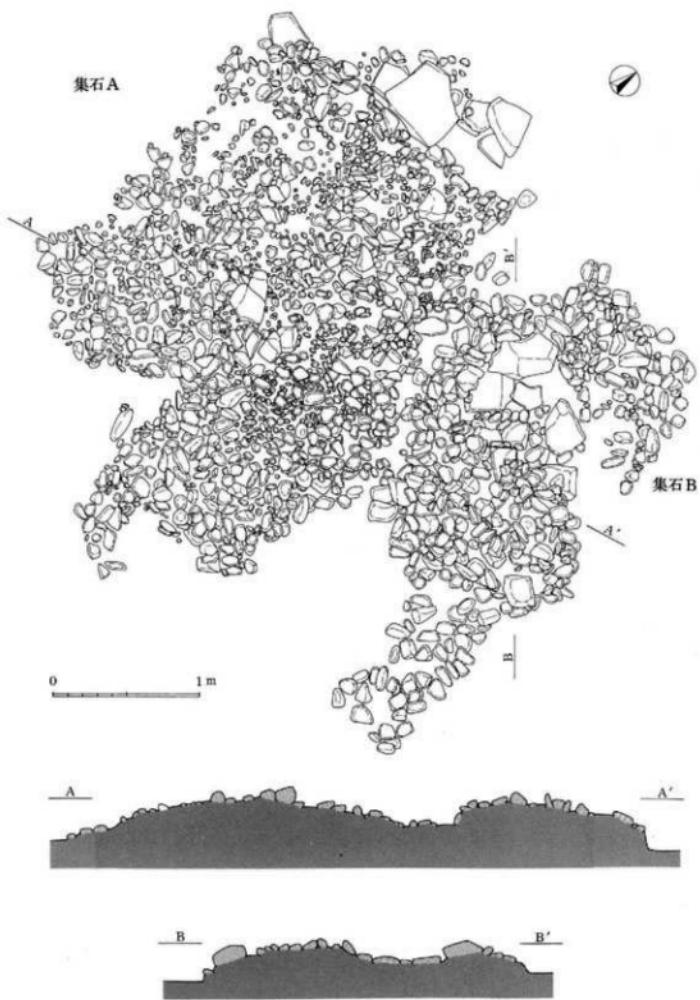


图 6 下层集石实测图



写真9 集 石



写真10 集 石 B



写真11 集石断ち割り状況

出土遺物 (図7・8)

1は灰釉手付水注で、第3層の造成された平坦面の盛り土内より出土したものである。口径5.5cm、底径9.6cm、器高19.1cmを測る。口縁2/3、把手部分1/3を欠損するが、他はほぼ完形に近く復元された。全体にロクロナデによって整形されるが、頭部は部分的にユビナデが加わる。水注部の作りは全体に粗雑で粗い箇削り痕をそのまま留める。下半には胴部との接合の際に生じたユビナデ痕を顕著に残す。把手部外面には3条の沈線を施す。高台は貼付け高台で、底部は静止ケズリ後ユビナデが成される。施釉は口縁から胴部上半にかけて行なわれ、また底面にも認められる。瀬戸系の灰釉と考えられ、鎌倉～室町期の所産と考えられる。

2・3は青磁破片で、第4層の下層集石上面より出土したものである。

4～26は珠洲系陶器で、4～11は壺、12～26は壺もしくは甕の破片と考えられる。27～45は擂り鉢で、46は擂り皿であろうか。珠洲系や常滑系のものが認められるが主体は珠洲系と考えられる。47～49は同一個体の可能性が高く、珠洲系の甕と考えられる。50～57は須恵器甕で、50～54には格子タタキ、55～57には平行タタキが認められる。58～60は弥生時代後期箱清水式期の壺口縁部破片である。

2 調査のまとめ

最後に調査成果の要点と今後の課題を記して調査のまとめとしたい。

墳丘は基本的に3段階に分けて考えられる。第1は第4層上面にて検出された下層集石で、集石上面より出土している青磁破片との関連を考慮するならば、時期的には平安時代末期～中世前半に構築されたものと考えられる。しかし、特別な内部施設の存在は認められないことや、後に築かれる中世火葬墓の造成面とも直接的な関係を認め難いことなどから、その構築の時期・目的等については不明と言わざるを得ない。

中世火葬墓群は、下層集石の東斜面を再利用し盛り土造成によって平坦面を作出した後に、1号墓の埋葬を行なう。その後、その周辺に2～5号墓の埋葬を行なっている可能性が高いが、副葬品・蔵骨器等が存在せず、構築時期や各墓の時間的前後関係については不明と言わざるを得ない。しかし盛り土内より出土した灰釉手付水注よりすれば、その構築時期はさかのぼって鎌倉～室町時代と考えられる。

この中世火葬墓は、その後新たに上層に集石が行なわれたり、周辺に擾乱が及ぼされたりして現代に至ったものと考えられる。

長野市内における中世墳墓の調査例は、蔵骨器と想定されるものの出土を除いては、正式調査がなされたものはいまだ類例が少なく不明瞭な部分が多い。

今後、これら中世墳墓の立地や墓構造・墓域構造の型式学的研究が進行していく中で、その変遷やこれらの墓に埋葬された造墓階層の問題、さらにはこういった中世墳墓の分析を通しての当時の集団関係などが検討されいかなければならぬだろう。

本報告ではそのような検討作業は成し得なかつたが、小規模な発掘調査ながらその基礎資料としての一例を提示できた意義は大きいと思われる。

最後に調査から整理・報告書作成作業に至るまでご指導・ご協力を賜った関係者各位ならびに、調査の実施に当たって深いご理解を頂き絶大なご協力を賜った長野市総内町区土地区画整理組合に心から感謝申し上げ、調査のまとめとしたい。

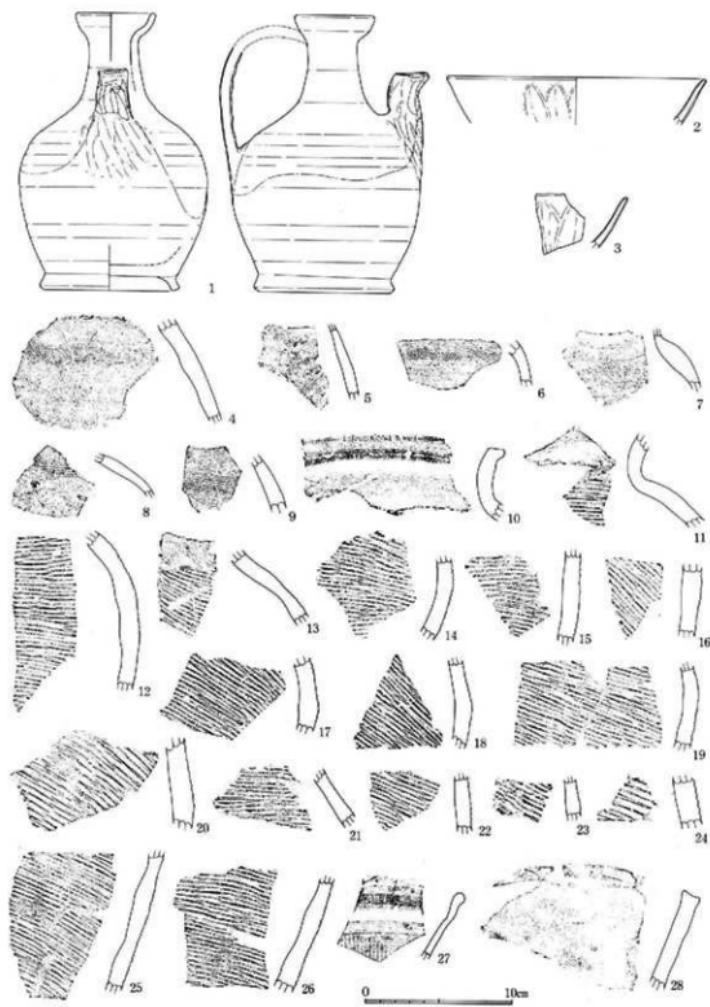


図7 出土遺物実測図ならびに拓影

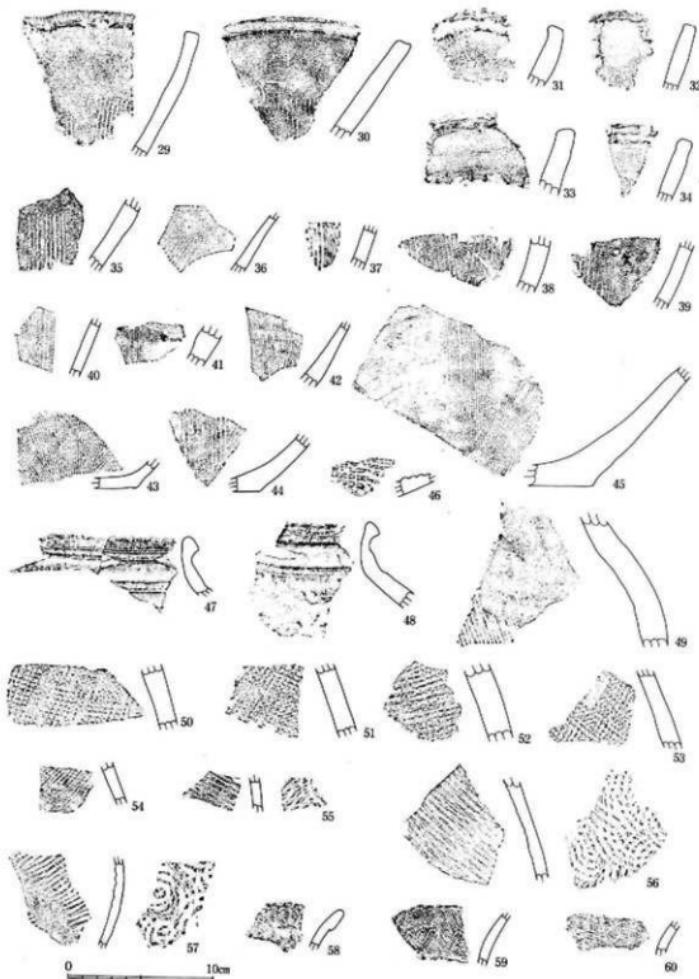


图8 出土遗物拓影



写真12 調査地周辺の地形

長野市の埋蔵文化財第54集

古町遺跡流人塚

平成5年3月20日 印刷
平成5年3月30日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター
印刷 奥山印刷工業株式会社